

中河与一文芸賞（作文）

うそとぼく

香川大学教育学部附属坂出小学校 三年

増田 壮志

うそをついた。

しゆく題がまだ全部終わっていないのに、「終わった。」と言ってゲームをした。その日の夜、うそがばれた。お母さんにおこられた。いつもはわらっているお母さんが、まるでおにのようにおこっていた。

本の中で、「お母さんはうそをつくなというけど、お母さんもうそをついたことがあって、うそは苦しいと知っているから、そういうんだと思う」という男の子の言葉が心にのこった。うそをついた時、ぼくはドキドキした。はじめは、うそがばれなくてホッとしたけど、ドキドキはなくならなかった。ゲームをしている時も、なんかいつもより楽しくなかった。ぼくのお母さんもうそをついたことがあるのかな。

「言っていることはうそでも、うそをつく気持ちは本当なんだ」男の子はこうも言っていた。ぼくは、あの時どうしてうそ

をついたのだろうと考えてみた。しゆく題をするのが、めんどくさかったし、早くゲームがしたかった。だから、うそをついた。ぼくは「しゆく題は終わった。」とうそをついたけど、あの時のぼくの気持ちは本当なんだ。

だけど、うそをつくと「信らい」が失われるらしい。お母さんは、しゆく題をしていないことではなくて、うそをついたことにおこっていると言った。ぼくの言葉やぼくを信じてくれている気持ち。うそをつくと、そういうのが全部くずれてなくなってしまう。そして「一度失った信らいは、かんたんには取りもどせないんだよ。信じているからこそ、うそをつかれた時のかなしさは大きい。」と言ったお母さんの言葉に、ぼくはかなしくなつて、ないた。

ついても良いうそがあるということも知った。相手のことを思いやって、相手をきずつけないためのうそのことをホワイトライというらしい。うそなのに、そこには本当のやさしさが入っているうそらしい。だから、うそが全部わるいというわけではないということも分かった。

ぼくは、どうしたらうそをつかなくなるんだろうと思って、考えてみた。だけど、頭の中に答えは出て来なかった。みんな、うそをつくのかなと、ぼくは思った。この本を読んで「う

そ」について考えて、お母さんがあの時、どうしてあんなにものすごくおこっていたのが少し分かったような気がする。

ぼくは、もう二度とうそをつかないと、かんたんには言えない。ぼくはまた、うそをつくかもしれない。でも、うそをついた時のあのドキドキや、ぼくのことを信じてくれている気持ちが無くなってしまふかなしさはわすれたくない。だから、もし、またうそをつきそうになったら、お母さんと話したことや本を読んで今日考えたことを思い出したい。そして、うそをつくべく自身に伝えたい。うそをつくと「信らい」がなくなるんだよ。ぼくを信じてくれている人をかなしませるの？